

(別表第1)

## サービス評価結果表

### サービス評価項目

(評価項目の構成)

#### I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

#### II.家族との支え合い

#### III.地域との支え合い

#### IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!  
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!  
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 8 月 30 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	8名	

※事業所記入

事業所番号	3873700367
事業所名 (ユニット名)	グループホーム 瀬戸あいじゅ 汐風
記入者(管理者) 氏名	那須 百合
自己評価作成日	令和 4 年 8 月 5 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 私たちは、ご利用者様に満足していただけることを第一に高品質のサービスを提供し地域社会にもっとも信頼され安心される施設作りを目指します。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 (前目標) ・地域社会のケアの拠点としての機能を果たす ・地域との関わりを増やす コロナ禍により施設行事や地域行事が実施されておらず、地域との関わりを増やすことは行えていない 伊方町からの依頼があり広報誌の取材を受け入れた</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は、特別養護老人ホームやケアハウス等が併設された3階建ての複合施設の1階部分にあり、窓からは、海の絶景が眺められるほか、反対側からは、山の景色も見られるなど、自然豊かな場所に立地している。以前は、隣にいらすパークの食堂があり、夏には海水浴の客でにぎわう時期も見られたものの、食堂の移転やコロナ禍もあり、近隣の民家も少なく、人通りはまばらになっている。コロナ禍において、外出や面会の制限が設けられているものの、日頃から海岸沿いを散歩したり、少人数でドライブに出かけたり、事業所の中央部分にある中庭のウッドデッキに出て、天気の良い日には日光浴や外気浴をするなど、職員は少しでも利用者が気分転換をできるように努めている。また、町行政から提供されたタブレットを活用して、オンライン面会を実施するほか、居室の窓越して面会に対応する工夫もしている。さらに、複合施設・事業所として、町行政から福祉避難所に指定されているほか、原子力災害等の際の避難場所となる屋内退避棟(シェルター)の設置に協力をしている。加えて、管理者等は、職員の勤務体制の希望に対応したり、希望休や有給休暇を取り入れたりするなどの働きやすい職場づくりに努めており、職員は管理者等とも話しやすく、職員同士の良好な関係も築かれ、近年離職者はほとんどいない。</p>
--	---	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくてきている ○ほぼできている △時々できていない ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>I. その人らしい暮らしを支える</b>									
<b>(1) ケアマネジメント</b>									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	アセスメントや面談記録をもとに日々のかかわりの中で希望や意向を聞いている	○	/	○	入居前に、管理者等は自宅や他の施設を訪問して、利用者や家族と面談を行い、思いや暮らしの希望、意向などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、利用者から思いや意向を聞くほか、意思疎通が困難な利用者には、職員が表情やしぐさを観察し、思いをくみ取るよう努めている。さらに、把握した内容は、アセスメントシートや日常生活記録表等に記録して、職員間で共有するよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	日々の様子や表情、行動を見て検討するようにしている	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	入所時の面談記録や面会時に家族にも思いを聞いている	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	面談記録やアセスメント、日々の記録を残している	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	職員間で気づきを話し合いながら、本人の思いに添えるようにしている	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所時、家族や関わってきたケアマネなどから情報を収集している。	/	/	○	入居前に、管理者等は自宅や他の施設を訪問して、利用者や家族と面談を行い、面談記録や法人独自のアセスメントシートを活用して、生活歴や現状などの聞き取りをしている。また、以前利用していた他の施設や介護サービス事業所等の関係者から情報を聞くほか、病院等からサマリーの提供を受けることをある。また、日々の生活の中で、利用者から新たな情報を聞いたり、電話連絡時を活用して、家族に確認や情報を聞いたりしている。さらに、把握した情報は、アセスメントシート等に記録を残すとともに、新たな情報は追記するなど、職員間で情報を共有するよう努めている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	できないと決めつけず職員と一緒に、状態の把握に努めている。アセスメントを行い定期的に見直ししている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	申し送りや口頭での引継ぎ、日々の記録に残し把握している	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	本人との会話の中や他者との会話の中で、何を求め必要としているかを検討している	/	/	○	事前に、職員は家族から意見や意向を聞くとともに、往診時に、医師や看護師から指示やアドバイスをもらっている。また、ユニット毎に、事前に得られた情報をもとに、利用者が参加した担当者会議を活用して職員間で話し合い、一人ひとりの課題の検討やより良いサービス提供に努めている。さらに、管理者等は、遠方で暮らしている家族からは近況を聞くことは困難なほか、意思疎通の難しい利用者の課題把握は難しいと感じている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	本人の課題を検討したうえで課題を明らかにし把握している	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	△	本人の思いや意向をもとに介護計画を立案している。意向を伝えられない方は職員本位になっていることもある	/	/	/	事前に、職員は家族から思いや意向を聞くほか、往診時等に医師などの関係者から意見等ももらっている。また、利用者が参加した担当者会議の中で、事前に把握したアセスメント情報をもとに、出された意見を踏まえて職員間で話し合い、計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、家族から出された「けいなくようにして欲しい」などの意見を反映させて、サービス内容に日常生活リハビリのメニューを取り入れた計画となるよう努めている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人や家族の希望・意向を反映し介護計画を作成している	○	/	○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	自分の意向が伝えられない方は、日々の暮らしが本人にとって安心できるようにしている	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	家族については入れているが家族のことは盛り込まれていない	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	いつでも見れるようにファイリングしている	/	/	/	○ ユニット毎に実施する担当者会議に職員は参加しているほか、個別のファイルを事務所に置き、職員はいつでも計画の内容を確認できるようになっている。また、一人ひとりの日々の日常生活記録表の上の部分には、ケアプランの実施状況の欄が設けられており、計画に沿ったサービス内容の実施状況のほか、実施できなかった理由などを記録に残している。さらに、24時間の時系列で記載できるようになっており、利用者の言動も記載することができている。加えて、法人本部等は、介護ソフトを活用して、タブレットやパソコンで日常生活記録等が記載できるようになってきており、一部の職員は使用に対して拒否反応を示すことが多く考えられるものの、将来的に職員の記録の負担軽減等のため、徐々に職員間で検討をしていくことを期待したい。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	介護計画を実践し、日々記録に残している	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	個々の期間に応じて見直しを行っている	/	/	/	○ 介護計画は、3か月に1回見直しをしている。月1回、担当職員が日常生活記録表等を確認しながらモニタリングを行うほか、計画作成担当者が確認の上で、家族にサービスの実施状況や日常の活動状況などが記載された近況報告を送付して、利用者の様子を伝えている。また、軽度な状態の変化には経過を観察することがあるものの、入退院時や状態の大きな変化が見られた場合には、現状に即した介護計画の作成をしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	モニタリングを行い、アセスメントの見直しを行っている	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	変化があったときはその都度見直しを行っている	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	その都度職員間で話し合っている	/	/	/	○ コロナ禍以前は、定期的に職員会やユニット会を開催できていたものの、コロナ禍において、2～3か月に1回程度のユニット会の開催に留まっている。会議への全ての職員の参加は難しいものの、参加できなかった職員には、会議録を回覧して、確認してもらっている。また、緊急案件のある場合には、管理者や主任等で話し合うとともに、不在の場合には連絡をもらい、指示や対応をしている。さらに、会議の実施にかかわらず、日頃から職員は管理者や主任に意見を伝えることができている。今後は、コロナ禍においても、月1回ユニット会等を実施するなど、定期的に職員間で話し合うとともに、情報共有ができるように、職員間で検討することを期待したい。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	相互の意見交換がしやすい雰囲気づくりをしている	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	一度に全員の参加は難しいが、参加できない職員には事前に意見をもらったり会議録を回覧している	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	業務日誌や連絡ノートを活用している	/	/	/	○ 日々、朝夕の申し送りを口頭で実施している。また、介護業務日誌や申し送りノートを活用して、利用者の変化や様子等の記録も残しており、職員は出勤時等に確認するとともに、確認後には押印をしている。押印がない職員には、管理者等が確認するように伝えるなど、確実な情報伝達に努めている。さらに、事業所内にはグループLINEの機能が存在するものの、中には登録のない職員もあり、コロナ禍の指示や連絡等の活用には留まっている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	「その日したいこと」の把握までは行っていないが、できることについては行うようにしている	/	/	/	○ その日に着る洋服や飲み物、入浴や散歩の有無など、職員は声をかけて、利用者に確認して選択してもらおうなど、自己決定してもらえるような支援に努めている。また、地元の話や昔懐かしい話をしたり、好きな歌を歌ったり、海岸沿いを散歩時などには、利用者の活き活きとした表情も見られ、職員は少しでも楽しみのある生活が送れるような支援をしている。さらに、訪問調査日には、職員と会話を交わしながら食事をするなど、利用者の微笑ましい笑顔を見ることができた。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	自己決定できるような声掛けを工夫し、自己決定できる場を設けている	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	職員の都合を優先していることが多いが、その人のペースで行うようにしている	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	日々声掛けを行い、昔の話、子供の話などを聞き職員とともに楽しい場づくりをしている	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	△	意思疎通が困難な方は、その時の顔の表情などを見るよう心掛けている	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	介助時には常に声をかけ、同意を得てから介助に入っている	○	△	○	○ 事業所では、行事や研修などの年間活動計画を立てて、接遇の勉強会などを実施し、職員は人権や尊厳などを学んでいる。時には、耳の遠い利用者にも、大きな声で話しかけたり、あからさまに「トイレに行こう」と利用者に向いたりする職員も見られ、職員同士で注意し合うとともに、言いにくい場合には管理者等に伝えて、該当職員に注意喚起をしている。さらに、居室への入室時に、職員はノックや声かけをして、了承を得てから入室するとともに、リビングで過ごしている不在時にも、事前に利用者へ声をかけて、目的を伝えたと入室をすることができている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	プライバシーに配慮しながら介助を行っている	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室に入る際はノック、声掛けをし同意を得てから入室するようにしている	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入職時に誓約書を交わし、理解し遵守している	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	職員は、知らないことを教えていただいたり、常に感謝する言葉を出し伝えている	/	/	/	洗濯物たたみや調理の下ごしらえ、花の水やりなど、利用者に手伝わってもらった場合や、利用者に野菜の作り方や地元のことを教えてもらった場合には、職員は「ありがとうございます」などの感謝の言葉を伝えている。また、利用者の車いすを他の利用者が押して、トイレへ誘導したり、洗濯物をたたんで、仕分けてくれる利用者が、他の利用者に「持って行きなさいよ」と声かけをしたり、お茶の葉っぱを入れるを手伝うなど、利用者同士が助け合う場面も見られる。さらに、不穏な利用者が、興奮して杖を振りかぶるなどのトラブルが起こりそうな場面も見られ、職員は早期に利用者との間に入ったたり、相性の悪い利用者同士の席席を考慮したりするなどの対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者同士で作業をする時間を大切にしている	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	○	中の良い方や同郷の方を近くにしたり、職員が傍でいることで疎外感を感じさせないようにしている。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	職員が近くにいることでトラブルが起こりそうになった時には間に入り対応している	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入所前の面談や家族、本人との会話の中で確認しているが十分把握できていない	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	コロナ禍により行っていない。以前は家族の協力のもと出かけている方もいたが全員ではない	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	外出の機会がコロナ禍によりなくなったが、中庭を活用し外に出る機会を作っている	○	×	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられているものの、海岸沿いの道路を散歩したり、少人数でドライブに出かけたり、事業所の中央部分にある中庭のウッドデッキに出て、天気の良い日には日光浴や外気浴をするなど、職員は少しでも利用者が気分転換ができるよう支援している。中には、中庭の片隅で野菜や花を育てて、水やりなどの世話をしている利用者もいる。また、車いすを使用している利用者にも、希望を聞き、同様の支援にも努めている。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	行っていない	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	勉強会に参加し理解を深めている。また、個々の症状や要因についても理解し適切な対応を行うようにしている	/	/	/	定期的に、職員は勉強会で認知症のことを学び、行動や症状などの理解促進に努めているものの、職員の個人差も見られ、管理者等は「まだまだ、繰り返し学ぶ必要がある」と感じている。また、日々のラジオ体操やリハビリ体操が習慣化されているほか、散歩や家事などの生活リハビリを取り入れ、職員は利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、自分で行うことは自分でしてもらい、できそうな着替えのボタンかけを時間が掛ってもしてもらい、職員は見守りや待つ介護を心がけた支援に努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	今できることを継続させて機能の維持を図るようにしている。状態の変化に気づきその都度職員で話し合い対応している	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	できること・できそうなことは時間をかけてでも行っていただき職員は見守りしている。	○	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	女性の方は今まで家事をされてきており、日常生活の中で家事を手伝うことにより役割を持っていた	/	/	/	洗濯物たたみや調理の下ごしらえ、花の水やりなど、職員は利用者一人ひとりに役割を担ってもらえるような支援に努めている。また、毎日日記を書くことを習慣としている利用者もいる。さらに、高齢化により、利用者が役割を担うことが難しくなっても、職員は些細なことでもできる役割を見つけるよう努めており、日めくりカレンダーをめくることを日課として担ってもらっている利用者もいる。さらに、散歩などに出かける際には、張り切った帽子をかぶる利用者があるなど、少しでも喜びや張り合いを持ってもらい、職員は役割や出番づくりをしながら、楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	その方に応じた、できることを行っている	○	△	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	自分らしく身だしなみを整える方法を把握している				毎朝、自分で着替えて、化粧をしたり、ピアスを付けたりするなど、おしゃれを楽しんでいる利用者もいる。また、整容の乱れが見られた場合には、職員がさりげなくフォローをしたり、食べこぼしなどの汚れが見られた場合には、居室等へ移動してもらい、着替えなどのサポートをしたりしている。さらに、ベッド上で過ごすことが多い利用者にも、日中は普段着に着替えてもらうなど、メリハリのある生活が送れるよう努めている。	
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	服装はその日の希望に沿って整えられるようにしている					
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	季節に合わせた服装などを声掛けしながら、本人の気持ちに沿って支援している					
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出する際には、季節に合わせた服装に注意し、その日の気温・天候にも配慮している					
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカバしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	さりげなく声掛けし汚れを取ったり更衣している	○	○	○		
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	家族の協力のもと、希望する店に行っている方もいる					
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	定期的に訪問理容で支援を行っている					○
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	意味や大切さを理解したうえで一緒に行っている				複合施設の栄養士が、郷土料理や旬の食材などを取り入れた献立を作成するとともに、厨房から各ユニットに食材が届けられ、利用者へ調理の下ごしらえや後片づけなどを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。朝食は、厨房からおかずや汁物が届けられ、各ユニットで炊飯を行い、職員は盛り付けて、利用者へ提供をしている。行事に合わせたメニューが提供されるほか、そうめん流しをしたり、おでんの鍋を囲んだり、オードブルの郷土料理や弁当を注文するなど、職員は、少しでも利用者へ食事が楽しみになるよう努めている。苦手な食材のある場合には、代替品を用意している。食器類は、入居時に使い慣れた茶碗とお椀、箸を持参してもらいほか、破損した場合には、事業所で用意した使いやすい物を使用している。また、コロナ禍以前は、同じテーブルを囲んで、一緒に食事を摂ることができていたものの、現在はコロナ禍の感染対策のために、職員は見守りやサポートを行い、別々に食事をしている。また、利用者の状態に合わせて、刻みや一口サイズなどの食の形態にも対応するとともに、少しでも見目がきれいになるような盛り付けの工夫をしている。さらに、各ユニットのキッチンで調理をしており、利用者に音や匂いを感じてもらうことができているほか、リビングには、毎日の朝昼晩のメニューを記載したボードが設置され、食事が待ち遠しくなるような工夫もしている。加えて、職員間で調理方法を話し合うとともに、分からない場合には、栄養士等に確認をしている。	
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	献立や買い物は施設内の厨房が行っている。調理の下準備や後片付けは可能な限りできる方とともにやっている					○
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できることを一緒に行う事により自信や達成感、食欲アップにつなげられるように支援している					
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	個々の苦手なもの、アレルギーのものを把握し代替品で対応している					
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのものを取り入れている。	○	献立は施設内の栄養士が作成している。郷土料理や行事に合わせたメニューを作成している					○
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしいような盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	◎	個々の状態にあわせて、食べやすい大きさや量等、工夫している					
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	入所時にご自身のものを持ってきていただいている					○
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	現在は感染症予防の観点から一緒に食事は行っていないが、以前は一緒に食事をしていた。食事中は、職員が見守りサポートしている					○
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	ユニット内で調理することで音や匂いを感じてもらえるようにしている			○		◎
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	食事・水分量をチェックし把握している					
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	水分摂取量の少ない方には、水分補給の回数を増やしたり、飲み物の種類を変えて対応している					
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	栄養士が献立を作成している。調理方法など分からない時は都度確認している					○
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	食材はその日に使用する分を厨房からもらい冷蔵庫で管理。調理器具は使用都度、消毒している					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	理解し対応している	/	/	/	職員は勉強会で学ぶほか、歯科医からアドバイスをもらうなど、口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は声をかけて、リビングの横にある洗面台で、利用者は歯磨きなどの口腔ケアを実施するとともに、サポートの必要な利用者には、見守りや磨き残しなどの介助をしている。また、痛みの訴えや不具合が生じた場合には、訪問歯科の治療などに繋げている。さらに、入歯の洗浄ができる利用者には、自分で洗浄してもらうとともに、夜間等には洗浄液に浸けて、清潔保持に努めている。口腔内の確認を嫌う利用者があるほか、自分で歯磨きをしている利用者の口腔内までは確認することができていないため、週1回決めた曜日に口腔内の状況を確認するなど、定期的に全ての利用者の口腔内の状況の確認を行い、異常が見られた場合には、早期に訪問歯科などの治療に繋げられることを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時に確認している。本人から訴え時は歯科医に相談し治療している	/	/	/	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	勉強会を行い日々の支援に活かしている	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	自身で洗える方は洗っていただき洗浄液につけている	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	△	自身で口腔ケアを行っており、嫌がられる為、確認できていない方もいる。不調を訴える方は訪問歯科医に診ていただいている。	/	/	/	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	トイレでの排泄を促している。尿意を訴えられない方は、個々の時間にあわせてトイレ誘導を行っている。	/	/	/	高齢化等に伴い、ほとんどの利用者はリハビリパンツやおむつを使用している。中には、布パンツで過ごすことのできている利用者があるほか、夜間のみ、ポータブルトイレやおむつを使用している利用者もいる。また、日中には、健康・サービステック表を活用して排泄パターンを把握し、職員は利用者一人ひとりに合わせた声かけやトイレ誘導を行い、トイレで排泄ができるよう支援している。入院時に、おむつを使用した利用者や、退院後にこまめなトイレ誘導で、トイレでの排泄などの自信を取り戻してもらうことにより、リハビリパンツ等の使用に改善できた利用者もいる。さらに、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、職員間で適切な用品を話し合うとともに、家族に確認の上で、使用をしている。加えて、水分補給や腹部マッサージ、服薬などで排泄をコントロールするよう努めているものの、慢性的な便秘の利用者もあり、医師に相談の上で、看護師等が浣腸の対応を行い、排便をすることができている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解し食事や水分など気を付けている	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排泄チェック表に記載しパターンを把握するよう努めている	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々々の状態にあった支援を行っている。	○	体調の悪い時以外は、トイレでの排泄を促している。おむつ使用について、常に職員間で話し合っている。	◎	/	/	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	訴えがなくても時間をながら誘導している。病的なこともあるので、尿量や尿色の異常などあれば受診している。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個々のパターンや兆候にあわせて早めに声掛けや誘導を行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人、家族、職員間で相談しオムツの使用を決めている。本人の尿量に応じて使用するものを決めている。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	個々の尿量や昼夜に使い分けている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	水分等多めに摂取して頂いたり、腹部マッサージなど行っているが、自然排便にはつながらないため、便秘薬を併用している。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	△	曜日や時間帯は希望に添えていない。温度や入浴時間は個々に合わせている	◎	/	○	利用者は、週2回入浴することができる。職員の勤務体制によるものの、午前と午後の入浴を可能としている。また、利用者の希望に応じて、湯の温度や湯船に浸かる時間などの対応をしている。さらに、「汗をかいていないのでいい」と、入浴を拒む利用者もあり、無理強いはいしないものの、日にちや時間を代えて声かけをするなどの工夫を行い、入浴をしてもらうことができている。事業所内の浴槽は個別浴槽のため、湯船に浸かりにくくなった利用者には、シャワーチェアを活用して入浴支援をするとともに、利用者の状態に応じて、デイスービスの特殊浴槽を借りて支援したこともあり、職員は安心安全な入浴支援に努めている。加えて、ゆっくりとした入浴支援に努めるとともに、自分でできるところは洗浄してもらい、職員はできない部分の介助をしている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	個浴のため一人一人がゆっくり入浴できるよう支援している	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	できるところは自分で洗っていただき、できないところは介助している	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	拒む方は無理には行わず、日や時間を変えて本人が納得の上で入浴している。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前には、血圧・検温測定を行い健康状態の良い時に入浴している。入浴後も体調の確認をしている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	夜勤者が個々の睡眠状態を記録している。	/	/	/	事業所には、眠剤などの服薬をしている利用者があるものの、日中の体操や散歩などの活動量を増やしたり、落ち着ける環境づくりをしたりするなどの工夫を行い、現在は、ほとんどの利用者が夜間に良眠することができている。以前は、昼夜逆転をしていた利用者もあり、利用者の体調面を考慮して、職員は医師に利用者の昼夜の生活状態を伝えて、眠剤等を処方してもらうなどの対応にも繋げている。また、退院後に環境の変化などの不安から、不穏や夜に眠れない利用者もあり、医師と相談しながら、改善された利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	日中の活動を増やしたり落ち着ける環境作りを心がけている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	日中、夜間の状態を記録し主治医に伝えている。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	居室で過ごしたい方は、居室で過ごしていただいている	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	希望があるときには、手紙を書いたり電話をしている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人が「かけない、書いて」と言われるときは代筆している。電話など聞こえづらいときは、職員が間に入るよう支援している。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	気兼ねなく話ができるよう配慮している。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	本人に渡している	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	本人が話をしたいときに、電話をかけることについて理解していただいている	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	◎	理解している	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	近隣に店がなく買い物に行く機会がない	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」など一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	お金を所持している方もいるが、買い物までは行っていない	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時に話をしている	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	金銭管理は家族が行っている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	希望や状態に沿ったサービスを提供できるように努めている	◎	/	○	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられているものの、可能な範囲で、利用者や家族の要望には、柔軟に対応をしている。また、遠方に住んでいる家族も多く、要望に応じて、職員が病院受診を同行支援することも多くなっている。
<b>(3) 生活環境づくり</b>									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	玄関や建物周囲には季節の花が咲き、気軽に出入りしやすいようになっている	◎	○	○	事業所は、特別養護老人ホームやケアハウスが併設された3階建ての複合施設の1階部分にあり、玄関前には駐車場が確保されている。また、事業所の横には海の絶景が眺められるほか、反対側には山の景色も見られ、民家も少なく、人通りは少ないものの、車で来訪しやすくなっている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	○	季節感を味わえるような飾りつけを行っている	○	○	○	事業所の近くには、海の絶景が広がっているほか、木々が植えられた中庭のウッドデッキを囲むように、2ユニットが設置されている。中庭のウッドデッキには、リビング等から利用者は自由に出られるようになっており、設置されているベンチで寛いだり、片隅にある菜園に花や野菜を植え、水やりなどの世話をしている利用者もいる。また、オゾンやイオンの発生機能の付いた空気清浄機等が設置されているほか、利用者にモップ掛けや履き掃除などを手伝ってもらいながら、毎日清掃や消毒、換気を行き届き、快適な空間となっている。さらに、ユニットの入り口には、職員の名前と似顔絵を描いた一覧を貼り出し、家族や来訪者に職員を分かりやすくする工夫をしている。加えて、リビング等の壁には、季節に応じて、ひまわりのちぎり絵や銀杏の葉を飾ったり、利用者の好きな動物や風景の写真を貼り出ししたりしているほか、中庭に植えられた木々から季節の移り変わりも感じられ、利用者や来訪者は季節感を味わえるようになっている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日掃除や換気を行っている			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節感をに合わせた行事に参加している。また、中庭には季節の花や野菜を植えている			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う方同士で自由に過ごされている				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所時、使い慣れたものを持参してもらい居心地のいい空間を作っている	◎		◎	居室には、ベッドや床頭台、エアコン、クローゼット等が備え付けられている。入居時に、管理者等は、馴染みの物や使い慣れた物を持ち込めることを伝えており、テレビや冷蔵庫、たんす、仏壇を持ち込んでいるほか、家族の写真や飾りなど、居心地良い空間づくりをしている。また、広いクローゼットに片づけられ、すっきりとした印象を受ける居室も多い。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	安全を確保し、自立した生活が送れるよう支援している				○ 廊下やリビングは、ゆったりとした空間が確保され、車いすの利用者も移動しやすい動線が確保されている。また、居室が分かりにくい利用者には、職員が誘導するよう努めているほか、居室の入り口には、大きく名前を表示して、入室を認識しやすい工夫をしている。さらに、利用者が掃除を手伝えるように、モップなどを用意しているほか、自分で新聞を取っている利用者もいる。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	使用する際に渡している				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	○	所在確認を行い、自由に歩けるようにしている	◎	◎	○	職員は勉強会等で学び、鍵をかけることの弊害を理解している。複合施設には、事業所専用の玄関が設置されているものの、コロナ禍において、外出や面会の制限が設けられていることもあり、現在は複合施設の共用の玄関を使用している。また、玄関は外部から自由に入室することができ、複合施設の事務所職員が迎えてくれるものの、1階には、デイサービスの利用者もあり、海が近くあることから利用者の安全面等を考えて、内側からロックを解除してから、屋外へ出られるようになっている。さらに、日中には、ユニットの入り口は開放しているほか、普段履きのまま、自由に中庭のウッドデッキに出られるようになっている。加えて、外出願望のある利用者には、一緒に散歩に出かけるなどの対応をしている。夜間は防犯のため、19時から8時まで、玄関の施錠をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	その都度話し合っている				
<b>(4) 健康を維持するための支援</b>									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	面談記録やアセスメントに個々の病歴など明記している。いつでも閲覧できるようファイリングしている				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	毎日、バイタル測定を記録し、異常の早期発見に努めている				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	日中、夜間を問わずいつでも協力医療機関に連絡が取れる体制を作っている				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	入所前からのかかりつけ医に受診されている方もいる	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	訪問診療を定期的に受けている。常に連携を図っている				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	その都度、連絡・相談・報告している				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院時には、本人の状態を明記したサマリーを渡し情報提供している				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	日頃から情報交換や相談を行い連携を図っている				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	看護師の配置はないが、何かあれば協力医療機関に相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	協力医療機関に24時間連絡が取れる体制を作っている				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	普段と様子が違うなどの変化があれば協力医療機関に相談し受診している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	個々の薬剤情報をファイリングし理解に努めている。異常があれば、家族や医師に相談している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	薬の管理は職員が行い、医師の指示通り服薬助助を行い誤薬のないよう工夫している				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日々の状態を観察し記録している				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入所時や状態の変化時に家族と相談している				事業所では、看護師が配置されていないこともあり、開設時から看取り支援は実施しておらず、入居時に、管理者等は重要事項説明書等を活用して、家族等へ対応できることを伝えるとともに、医療支援が必要になった場合には、病院や他の施設へ転院するようになることを伝えている。また、職員は、可能な限り、事業所内で継続した生活が送れるよう支援しているものの、状態の変化が見られた場合には、家族や医師を交えて話し合い、方針を共有して、転居等の手続きを進めている。さらに、医療行為等が必要になった場合には、併設された特別養護老人ホームへ転居するほか、他の施設や病院へ転院する利用者もいる。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化、状態の変化について家族や主治医と話し合っている	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	その都度どこまで支援できるのか話し合っている				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入所時や状態の変化時に家族に説明している。				
		e	重度や終末期の利用者が日々より良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	重度化、状態の変化時には、医師の意見を踏まえたうえで家族と相談している				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族の気持ちをその都度聞いている				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	マニュアルを作成。感染症について勉強会を行っている				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	マニュアルに沿って対応。勉強会も実施。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	最新の情報を随時取得している				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	職員は出勤時に手洗い、うがいを徹底している。利用者は毎食前、手指の消毒を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>II. 家族との支え合い</b>									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	日々の状況報告だけでなく、日常会話も含めて伝えている	/	/	/	コロナ禍以前は、家族に行事への参加を呼びかけて、そうめん流しや複合施設の夏祭りなどの参加協力をしてもらい、交流を図ることができていたものの、コロナ禍において、家族への行事参加の呼びかけは自粛している。事業所には、面会制限も設けられているものの、町行政から提供されたタブレットを活用して、オンライン面会を実施するほか、居室の窓越しで面会に対応する工夫をしている。また、毎月担当職員が、利用者の現状確認などのモニタリングをした近況報告を送付して、利用者の状況を伝えている。加えて、来訪時や電話連絡時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、意見や要望を聞くよう努めている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの事業所の出来事が家族に十分に伝わっていないことが窺えるため、毎月の近況報告の送付時に、事業所の出来事や職員の入退職等を記載した連絡事項を添えて送付したり、来訪時に伝えたりするなど、家族への周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	感染症対策により施設内での活動には参加できていない	○	/	○	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎日の暮らしぶりや日常の様子などを記入し近況報告として毎月送付している。	◎	/	○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	面会時は声をかけ、状況や状態を伝えている	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	×	感染症対策により行事の案内は行っていない。	×	/	△	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時に説明している。また、落ち着かないときや退院後のなどにもリスクを伝えている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	来訪時には、声をかけている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時に契約書、金銭面の明記されている重要事項説明書を説明し同意を得ている	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	状態が変化し退居が必要となった場合は、家族と相談の上で退居先に移れるように支援している。	/	/	/	
<b>III. 地域との支え合い</b>									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議等で施設への理解を図っている	/	◎	/	コロナ禍以前は、複合施設のシェルター等を活用して、避難訓練を実施したり、複合施設が合同して、運動会や夏祭りを開催したり、コーラスボランティアを受け入れるなど、地域住民等と交流を図ることができていた。近隣には、住宅が少ないものの、隣にある会社の技能実習生の寮があり、住民等と挨拶を交わすこともある。以前は、近隣にしろすパークの食堂があり、夏には海水浴の客でにぎわう時期もあったが、食堂の移転やコロナ禍もあり、人通りは少なくなっている。また、地域の高校が歌唱等を撮影したデータを送ってくれ、鑑賞を楽しんだこともある。コロナ禍において、地域住民とのあいさつ程度に留まっているため、コロナ禍の収束後には、地域行事に利用者と一緒に出かけたり、複合施設周辺には、地域住民が少ないこともあり、複合施設のケアハウスやデイサービス等の利用者を近隣住民と捉えて、交流を図ったりするなど、利用者が地域の一員として、継続した生活が送れることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	近隣に民家がないが、畑などに来られているときに出会ったり挨拶はしている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	ほとんどない	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	以前は行事にこられていたが、現在は感染症対策の観点から行事は行っていない	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	以前は行事にこられていたが、現在は感染症対策の観点から行事は行っていない	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	行っていない	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	近隣の高齢者福祉施設や事業所と災害相互応援協定を締結している。消火、避難訓練等を通じて消防署との関係を深めている	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人の参加がある。	×	現在は感染症予防の観点から書面会議になっている。	×	/	△	運営推進会議は、利用者や家族の代表、地区の区長、民生委員、保育所長、介護相談員、他の事業所の管理者、町担当者等の参加を得て開催をしている。コロナ禍以前は、そうめん流しや運動会などの行事に合わせて会議を開催して、利用者の様子を参加メンバーに見てもらい、意見をもらうことができていた。コロナ禍において、書面会議となっており、参加メンバーや家族に資料を送付しているものの、利用者家族等アンケート結果から、家族に会議への十分な理解が得られていないことが窺えるため、会議会則の所掌事項に沿ったより詳しい会議資料を作成したり、資料の送付時に、簡単なアンケート形式で意見を記載して返信してもらったり、コロナ禍の収束後には、全ての家族に会議への参加を呼びかけるなど、職員間で周知方法を検討するとともに、参加メンバー等から出された意見がサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	報告している	/	×	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	テーマに合わせて日程、時間調整をしていた。	/	/	○	
<b>IV.より良い支援を行うための運営体制</b>									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	法人の理念に沿って支援している	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内に掲示している	/	△	×	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	法人内の研修に参加している	/	/	/	事業所では、研修を含む年間活動計画を作成して、テーマを決めて新人や現任研修を開催し、職員のスキルアップに努めている。また、不適切ケアチェックシートを活用して、職員一人ひとりに振り返りの機会を設けるとともに、管理者等はコメントを記載して、職員に伝えている。複合施設の施設長が、定期的に事業所への来訪があり、利用者や職員の意見を聞いている。さらに、管理者は、日常業務に従事していることもあり、現場で職員の声を聞くとともに、相談にも応じている。加えて、管理者等は、職員の勤務体制の希望に対応するとともに、希望休や有給休暇を取り入れたり、ストレスチェックを実施したりするなどの働きやすい職場づくりに努めており、職員は管理者等とも話しやすく、職員同士の良好な関係も築かれ、近年離職者はほとんどいない。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	施設全体の勉強会計画に沿って勉強会を行っている	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	個々の努力や実績等を把握している	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	現在は感染症予防の観点から、他事業所の運営推進会議に参加できていないが、電話などで情報交換を行っている	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	ストレスチェックを実施している。職員同士、相談しやすい環境づくりを心かけている	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	マニュアルを作成している。マニュアルに沿って勉強会を実施している	/	/	/	○ 年間研修計画の中に、虐待防止等のテーマを取り入れ、職員は学んでいる。また、マニュアルを作成するとともに、身体拘束適正化委員会を活用して、職員間で話し合いをしている。さらに、職員は個別に「不適切な行為を行っていませんか」など、不適切ケアチェックを行い、自らの反省点を記載するとともに、管理者等が確認して、コメントを残すなど、ケアの振り返りに繋げている。時には、大きな声を発する職員が見られるものの、職員同士で注意し合うとともに、管理者等から該当職員へ確認を行い、注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返り話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	その都度話している。不適切ケアチェックを行い自身のケアを見直ししている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	職員の疲労が出ないように勤務を組んだり、ストレスによりケアに影響がでないか注意を払っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	マニュアルを作成している。マニュアルをもとに勉強会を行い理解している。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	常に職員間で話し合っている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	◎	現在そのような事例はない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	勉強会を行っているが、情報提供や相談にのるまではできていない				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	連絡体制は築けている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成し周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	実践的な研修は行っていない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットの報告書を作成している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	個々のリスクや危険を検討し、個別計画に取り入れている				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	◎	施設内のマニュアルを作成している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情があった場合は手順に沿って対応している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	寄せられた苦情は速やかに対応し納得が得られるようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口を設けている。面会や来訪時に個別に聞くようにしている。	◎		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くよう努めている。コロナ禍において、家族が来訪して話す機会は減少しているものの、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えた上で、意見や要望を聞いている。また、事業所には相談窓口を設置していることを家族等には伝えているものの、ほとんど相談が寄せられたことはない。さらに、管理者等は、職員と一緒に日常業務に従事していることもあり、現場で一人ひとりに声をかけて意見を聞いたり、個別の相談に応じたりするなど、職員の意見を取り入れて、一度試してみるなど、サービスの質の向上に繋がるよう努めている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	◎	苦情相談窓口を設け施設内に掲示している。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	個別に話を聞いている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	個別に話を聞くようにしている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年に一回自己評価を行っている				外部評価の自己評価は、職員一人ひとりが取り組むとともに、管理者や主任が取りまとめ、ユニット毎に作成をしている。サービスの評価結果は、職員会等で職員に周知するとともに、目標達成に向けて取り組んでいる。また、運営推進会議を活用して、管理者等は、評価結果や取組み状況を参加メンバーや家族に報告している。さらに、コロナ禍以前は、行事等に合わせて、運営推進会議を開催していたこともあり、参加メンバーに利用者の様子や取組み状況などのモニター的な役割を担ってもらい、意見や要望をもらうこともできていた。利用者家族等、地域アンケート結果から、サービス評価の取組みに対する十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、集合形式の運営推進会議において、アンケートの趣旨を伝えたり、取組み状況のモニターの協力を参加メンバーや家族に呼びかけて、意見をもらったりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標が達成できるよう取り組んでいる。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議にて評価結果や今後の取り組みについて報告している	×	×	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	行っていないため今後は行いたい。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	◎	災害ごとのマニュアルを作成している。				年2回、複合施設と合同で、消防署の協力を得ながら、日中や夜間を想定した避難訓練を実施している。また、各災害マニュアルを整備するとともに、県や町行政等と協力をしながら、原子力避難行動計画等に沿った訓練も実施している。さらに、複合施設は、町行政から福祉避難所に指定されているとともに、原子力災害等の際の避難場所となる屋内退避棟(シェルター)が設置されている。加えて、複合施設として、協力体制を確立するとともに、事業所内には、避難経路図を貼付して、外部の来訪者等にも分かりやすくしている。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して、十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲載したり、家族や地域住民に避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取組みが理解してもらえるよう、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	訓練計画に沿って実施している。				
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に点検している。				
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地区の合同訓練には参加するが、避難場所が施設内の屋内退避等になり協力体制は確保されていない	x	x	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	○	消防署立ち合いの元、訓練を行い指導や助言をいただいている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げていく認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	x	行えていない				複合施設・事業所として、地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。以前は、複合施設に在宅介護支援センターが存在していたものの、現在は、町行政の地域包括支援センターに相談機能が集約されている。地域アンケートの中には、「何でも相談できる機会を設けて欲しい」という記載もあり、近隣住民は少ないものの、複合施設と協力をしながら、出された意見に対応して、地域のケア拠点としての機能が発揮されることを期待したい。また、コロナ禍において、町行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加できる機会は減少しているものの、コロナ禍以前から他の事業所の運営推進会議に相互に参加し合うなど、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	x	行えていない		x	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	x	感染症予防の観点から解放していない				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	x	感染症予防の観点から受け入れていない				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	地域包括支援センター主催の勉強会があれば参加している。連携は普段から図れている。			○	

(別表第1)

## サービス評価結果表

### サービス評価項目

(評価項目の構成)

#### I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

#### II.家族との支え合い

#### III.地域との支え合い

#### IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!  
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!  
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 8 月 30 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	8名	

※事業所記入

事業所番号	3873700367
事業所名 (ユニット名)	グループホーム 瀬戸あいじゅ 浜風
記入者(管理者) 氏名	阿部 正美
自己評価作成日	令和 4 年 8 月 10 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 私たちは、ご利用者様に満足していただけることを第一に高品質のサービスを提供し地域社会にもっとも信頼され安心される施設作りを目指します。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 (前目標) ・地域社会のケアの拠点としての機能を果たす ・地域との関わりを増やす コロナ禍により施設行事や地域行事が実施されておらず、地域との関わりを増やすことは行えていない 伊方町からの依頼があり広報誌の取材を受け入れた</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は、特別養護老人ホームやケアハウス等が併設された3階建ての複合施設の1階部分にあり、窓からは、海の絶景が眺められるほか、反対側からは、山の景色も見られるなど、自然豊かな場所に立地している。以前は、隣にいらすパークの食堂があり、夏には海水浴の客でにぎわう時期も見られたものの、食堂の稼働やコロナ禍もあり、近隣の民家も少なく、人通りはまばらになっている。コロナ禍において、外出や面会の制限が設けられているものの、日頃から海岸沿いを散歩したり、少人数でドライブに出かけたり、事業所の中央部分にある中庭のウッドデッキに出て、天気の良い日には日光浴や外気浴をするなど、職員は少しでも利用者が気分転換をできるように努めている。また、町行政から提供されたタブレットを活用して、オンライン面会を実施するほか、居室の窓越して面会に対応する工夫もしている。さらに、複合施設・事業所として、町行政から福祉避難所に指定されているほか、原子力災害等の際の避難場所となる屋内退避棟(シェルター)の設置に協力をしている。加えて、管理者等は、職員の勤務体制の希望に対応したり、希望休や有給休暇を取り入れたりするなどの働きやすい職場づくりに努めており、職員は管理者等とも話しやすく、職員同士の良好な関係も築かれ、近年離職者はほとんどいない。</p>
--	---	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくてきている ○ほぼできていない △時々できていない ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I. その人らしい暮らしを支える									
(1) ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	アセスメントや面談記録をもとに日々のかかわりの中で希望や意向を聞いている	○	/	○	入居前に、管理者等は自宅や他の施設を訪問して、利用者や家族と面談を行い、思いや暮らしの希望、意向などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、利用者から思いや意向を聞くほか、意思疎通が困難な利用者には、職員が表情やしぐさを観察し、思いをくみ取るよう努めている。さらに、把握した内容は、アセスメントシートや日常生活記録表等に記録して、職員間で共有するよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	日々の様子や表情、行動を見て検討するようにしている	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	入所時の面談記録や面会時に家族にも思いを聞いている	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	面談記録やアセスメント、日々の記録を残している	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	職員間で気づきを話し合いながら、本人の思いに添えるようにしている	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所時家族や関わってきたケアマネなどから情報を収集している。	/	/	○	入居前に、管理者等は自宅や他の施設を訪問して、利用者や家族と面談を行い、面談記録や法人独自のアセスメントシートを活用して、生活歴や現状などの聞き取りをしている。また、以前利用していた他の施設や介護サービス事業所等の関係者から情報を聞くほか、病院等からサマリーの提供を受けることをある。また、日々の生活の中で、利用者から新たな情報を聞いたり、電話連絡時を活用して、家族に確認や情報を聞いたりしている。さらに、把握した情報は、アセスメントシート等に記録を残すとともに、新たな情報は追記するなど、職員間で情報を共有するよう努めている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	できないと決めつけず職員と一緒に、状態の把握に努めている。アセスメントを行い定期的に見直ししている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	申し送りや口頭での引継ぎ、日々の記録に残し把握している	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	本人との会話の中や他者との会話の中で、何を求め必要としているかを検討している	/	/	○	事前に、職員は家族から意見や意向を聞くとともに、往診時に、医師や看護師から指示やアドバイスをもらっている。また、ユニット毎に、事前に得られた情報をもとに、利用者が参加した担当者会議を活用して職員間で話し合い、一人ひとりの課題の検討やより良いサービス提供に努めている。さらに、管理者等は、遠方で暮らしている家族からは近況を聞くことは困難なほか、意思疎通の難しい利用者の課題把握は難しいと感じている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	本人の課題を検討したうえで課題を明らかにし把握している	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	△	本人の思いや意向をもとに介護計画を立案している。意向を伝えられない方は職員本位になっていることもある	/	/	/	事前に、職員は家族から思いや意向を聞くほか、往診時等に医師などの関係者から意見等ももらっている。また、利用者が参加した担当者会議の中で、事前に把握したアセスメント情報をもとに、出された意見を踏まえて職員間で話し合い、計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、家族から出された「けいなくようにして欲しい」などの意見を反映させて、サービス内容に日常生活リハビリのメニューを取り入れた計画となるよう努めている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人や家族の希望・意向を反映し介護計画を作成している	○	/	○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	自分の意向が伝えられない方は、日々の暮らしが本人にとって安心できるようにしている	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	家族については入れているが地域のことは盛り込まれていない	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	いつでも見れるようにファイリングしている				○ ユニット毎に実施する担当者会議に職員は参加しているほか、個別のファイルを事務所に置き、職員はいつでも計画の内容を確認できるようになっている。また、一人ひとりの日々の日常生活記録表の上の部分には、ケアプランの実施状況の欄が設けられており、計画に沿ったサービス内容の実施状況のほか、実施できなかった理由などを記録に残している。さらに、24時間の時系列で記載できるようになっており、利用者の言動も記載することができている。加えて、法人本部等は、介護ソフトを活用して、タブレットやパソコンで日常生活記録等が記載できるようになってきており、一部の職員は使用に対して拒否反応を示すことが多く考えられるものの、将来的に職員の記録の負担軽減等のため、徐々に職員間で検討をしていくことを期待したい。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	介護計画を実践し日々記録に残している				
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じた見直しを行っている。	○	個々の期間に応じた見直しを行っている				○ 介護計画は、3か月に1回見直しをしている。月1回、担当職員が日常生活記録表等を確認しながらモニタリングを行うほか、計画作成担当者が確認の上で、家族にサービスの実施状況や日常の活動状況などが記載された近況報告を送付して、利用者の様子を伝えている。また、軽度な状態の変化には経過を観察することがあるものの、入退院時や状態の大きな変化が見られた場合には、現状に即した介護計画の作成をしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	モニタリングを行い、アセスメントの見直しを行っている				
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	変化があったときはその都度見直しを行っている				
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	その都度職員間で話し合っている				○ コロナ禍以前は、定期的に職員会やユニット会を開催できていたものの、コロナ禍において、2～3か月に1回程度のユニット会の開催に留まっている。会議への全ての職員の参加は難しいものの、参加できなかった職員には、会議録を回覧して、確認してもらっている。また、緊急案件のある場合には、管理者や主任等で話し合うとともに、不在の場合には連絡をもらい、指示や対応をしている。さらに、会議の実施にかかわらず、日頃から職員は管理者や主任に意見を伝えることができている。今後は、コロナ禍においても、月1回ユニット会等を実施するなど、定期的に職員間で話し合うとともに、情報共有ができるように、職員間で検討することを期待したい。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	相互の意見交換がしやすい雰囲気づくりをしている				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	一度に全員の参加は難しいが事前に意見をもらったり会議後、会議録を回覧している				
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	業務日誌や連絡ノートを活用している				○ 日々、朝夕の申し送りを口頭で実施している。また、介護業務日誌や申し送りノートを活用して、利用者の変化や様子等の記録も残しており、職員は出勤時等に確認するとともに、確認後には押印をしている。押印がない職員には、管理者等が確認するように伝えるなど、確実な情報伝達に努めている。さらに、事業所内にはグループLINEの機能が存在するものの、中には登録のない職員もあり、コロナ禍の指示や連絡等の活用にも留まっている。
<b>(2) 日々の支援</b>									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	「その日したいこと」の把握までは行っていないが、できることについては行うようにしている				○ その日に着る洋服や飲み物、入浴や散歩の有無など、職員は声をかけて、利用者確認して選択してもらったりなど、自己決定してもらえるような支援に努めている。また、地元の話や昔懐かしい話をしたり、好きな歌を歌ったり、海岸沿いを散歩時などには、利用者の活き活きとした表情も見られ、職員は少しでも楽しみのある生活が送れるような支援をしている。さらに、訪問調査日には、職員と会話を交わしながら食事をするなど、利用者の微笑ましい笑顔を見ることができた。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	△	選べるときは選んでもらうようにしている。				
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	職員の都合を優先していることが多いが、その人のペースで行うようにしている				
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	日々声掛けを行い、昔の話、子供の話などを聞き職員とともに楽しい場づくりをしている				
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	△	意思疎通が困難な方は、その時の顔の表情などを見るよう心掛けている				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	介助時には常に声をかけ同意を得てから介助に入っている		△		○ 事業所では、行事や研修などの年間活動計画を立てて、接遇の勉強会などを実施し、職員は人権や尊厳などを学んでいる。時には、耳の遠い利用者にも、大きな声で話しかけたり、あからさまに「トイレに行くと利用者」に聞いたりする職員も見られ、職員同士で注意し合うとともに、言いにくい場合には管理者等に伝えて、該当職員に注意喚起をしている。さらに、居室への入室時に、職員はノックや声かけをして、了承を得てから入室するとともに、リビングで過ごしている不在時にも、事前に利用者に声をかけて、目的を伝えたと入室をすることができている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	プライバシーに配慮しながら行っている				
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室に入る際はノック、声掛けをし同意を得てから入室するようにしている				
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入職時に誓約書をかかわし、理解し遵守している				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	職員は、知らないことを教えていただいたり、常に感謝する言葉を出し伝えている	/	/	/	洗濯物たたみや調理の下ごしらえ、花の水やりなど、利用者に手伝ってもらった場合や、利用者に野菜の作り方や地元のことを教えてもらった場合には、職員は「ありがとうございます」などの感謝の言葉を伝えている。また、利用者の車いすを他の利用者が押して、トイレへ誘導したり、洗濯物をたたんで、仕分けてくれる利用者が、他の利用者に「持って行きなさいよ」と声かけをしたり、お茶の葉っぱを入れるを手伝うなど、利用者同士が助け合う場面も見られる。さらに、不穏な利用者が、興奮して杖を振りかぶるなどのトラブルが起ころう場面も見られ、職員は早期に利用者の中に入ったり、相性の悪い利用者同士の席席を考慮したりするなどの対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者同士で作業をする時間を大切にしている	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	○	トラブルを回避するために仲のあまりよくない方は近くにならないようにしている。また、会話が成り立たない時は職員が間に入るようにしている	/	/	/	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	職員が近くにいることでトラブルが起ころうになった時には間に入り対応している	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入所前の面談や家族、本人との会話の中で確認しているが十分把握できていない	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	コロナ禍により行えていない。窓越しで面会を行っている。以前は家族の協力のもと出かけている方もいたが全員ではない	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	コロナ禍のため外出できていない	○	×	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられているものの、海岸沿いの道路を散歩したり、少人数でドライブに出かけたり、事業所の中央部分にある中庭のウッドデッキに出て、天気のいい日には日光浴や外気浴をするなど、職員は少しでも利用者が気分転換ができるよう支援している。中には、中庭の片隅で野菜や花を育てて、水やりなどの世話をしている利用者もいる。また、車いすを使用している利用者にも、希望を聞き、同様の支援にも努めている。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	行えていない	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	勉強会に参加し理解を深めている。また、個々の症状や要因についても理解し適切な対応を行うようにしている	/	/	/	定期的に、職員は勉強会で認知症のことを学び、行動や症状などの理解促進に努めているものの、職員の個人差も見られ、管理者等は「まだまだ、繰り返し学ぶ必要がある」と感じている。また、日々のラジオ体操やリハビリ体操が習慣化されているほか、散歩や家事などの生活リハビリを取り入れ、職員は利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、自分で行うことは自分でしてもらい、できそうな着替えのボタンかけを時間が掛ってもしてもらい、職員は見守りや待つ介護を心がけた支援に努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	今できることを継続させて機能の維持を図るようにしている。状態の変化に気づきその都度職員で話あい対応している	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	できること・できそうなことは時間をかけてでも行っていただき職員は見守りしている。	/	/	/	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	女性の方は今まで家事をされてきており、日常生活の中で家事を手伝うことにより役割を持っていた	/	/	/	洗濯物たたみや調理の下ごしらえ、花の水やりなど、職員は利用者一人ひとりに役割を担ってもらえるような支援に努めている。また、毎日日記を書くことを習慣としている利用者もいる。さらに、高齢化により、利用者が役割を担うことが難しくなっても、職員は些細なことでもできる役割を見つけるよう努めており、日めくりカレンダーをめくることを日課として担ってもらっている利用者もいる。さらに、散歩などに出かける際には、張り切った帽子をかぶる利用者があるなど、少しでも喜びや張り合いを持ってもらい、職員は役割や出番づくりをしながら、楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	その方に応じたことをやっている	○	△	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	自分らしく身だしなみを整える方法を把握している				毎朝、自分で着替えて、化粧をしたり、ピアスを付けたりするなど、おしゃれを楽しんでいる利用者もいる。また、整容の乱れが見られた場合には、職員がさりげなくフォローをしたり、食べこぼしなどの汚れが見られた場合には、居室等へ移動してもらい、着替えなどのサポートをしたりしている。さらに、ベッド上で過ごすことが多い利用者にも、日中は普段着に着替えてもらうなど、メリハリのある生活が送れるよう努めている。	
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	希望を言われる方はあまりいないが、同じ服を着ないようにしている					
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	季節に合わせた服装などを声掛けしながら、本人の気持ちに沿って支援している					
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出する際には、季節に合わせた服装に注意し、その日の気温・天候にも配慮している					
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカバしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	さりげなく声掛けし汚れを取ったり更衣している	○	○	○		
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	家族の協力のもと、希望する店に行けている方もいる					
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	定期的に訪問理容で支援を行っている					○
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	意味や大切さを理解したうえで一緒に行っている				複合施設の栄養士が、郷土料理や旬の食材などを取り入れた献立を作成するとともに、厨房から各ユニットに食材が届けられ、利用者へ調理の下ごしらえや後片づけなどを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。朝食は、厨房からおかずや汁物が届けられ、各ユニットで炊飯を行い、職員は盛り付けて、利用者へ提供をしている。行事に合わせたメニューが提供されるほか、そうめん流しをしたり、おでんの鍋を囲んだり、オードブルの郷土料理や弁当を注文するなど、職員は、少しでも利用者に食事が楽しみになるよう努めている。苦手な食材のある場合には、代替品を用意している。食器類は、入居時に使い慣れた茶碗とお椀、箸を持参してもらいほか、破損した場合には、事業所で用意した使いやすい物を使用している。また、コロナ禍以前は、同じテーブルを囲んで、一緒に食事を摂ることができていたものの、現在はコロナ禍の感染対策のために、職員は見守りやサポートを行い、別々に食事をしている。また、利用者の状態に合わせて、刻みや一口サイズなどの食の形態にも対応するとともに、少しでも見目がきれいになるような盛り付けの工夫をしている。さらに、各ユニットのキッチンで調理しており、利用者に音や匂いを感じてもらえることができているほか、リビングには、毎日の朝昼晩のメニューを記載したボードが設置され、食事が待ち遠しくなるような工夫もしている。加えて、職員間で調理方法を話し合うとともに、分からない場合には、栄養士等に確認をしている。	
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	献立や買い物は施設内の厨房が行っている。調理の下準備や後片付けは可能な限りできる方とともにやっている					○
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できることを一緒に行う事により自信や達成感、食欲アップにつなげられるように支援している					
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	個々の苦手なもの、アレルギーのものを把握し代替品で対応している					
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのものを取り入れている。	○	献立は施設内の栄養士が作成している。郷土料理や行事に合わせたメニューを作成している					○
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしいような盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	◎	個々の状態にあわせて、食べやすい大きさや量に工夫している。見目がきれいになるよう盛り付けている					
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	一人ひとり別々のものを使用している					○
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	現在は感染症予防の観点から一緒に食事は行っていないが、以前は一緒に食事をしていた。食事中は、職員が見守りサポートしている					○
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	ユニット内で調理することで音や匂いを感じてもらえるようにしている			○		◎
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	食事・水分量をチェックし把握している					
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	水分摂取量の少ない方には、水分補給の回数を増やしたり、飲み物の種類を変えて対応している					
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	栄養士が献立を作成している。調理方法などわからない時は都度確認している					○
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	食材はその日に使用する分を厨房からもらい冷蔵庫で管理。調理器具は使用都度消毒している					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	理解し対応している				職員は勉強会で学ぶほか、歯科医からアドバイスをもらうなど、口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は声をかけて、リビングの横にある洗面台で、利用者は歯磨きなどの口腔ケアを実施するとともに、サポートの必要な利用者には、見守りや磨き残しなどの介助をしている。また、痛みの訴えや不具合が生じた場合には、訪問歯科の治療などに繋げている。さらに、入歯の洗浄ができる利用者には、自分で洗浄してもらうとともに、夜間等には洗浄液に浸けて、清潔保持に努めている。口腔内の確認を嫌う利用者があるほか、自分で歯磨きをしている利用者の口腔内までは確認することができていないため、週1回決めた曜日に口腔内の状況を確認するなど、定期的に全ての利用者の口腔内の状況の確認を行い、異常が見られた場合には、早期に訪問歯科などの治療に繋げられることを期待したい。	
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	×	確認を嫌がられる方もいる。きちんと把握はできていない					○
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	勉強会を行い日々の支援に活かしている					
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	自身で洗える方は洗っていただき洗浄液につけている					
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	△	自身で口腔ケアを行っており、嫌がられる為、確認できていない方もいる。不調を訴える方は訪問歯科医に診ていただいている。					
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	トイレでの排泄を促している。尿意を訴えられない方は、個々の時間にあわせてトイレ誘導を行っている。				高齢化等に伴い、ほとんどの利用者はリハビリパンツやおむつを使用している。中には、布パンツで過ごすことのできている利用者があるほか、夜間のみ、ポータブルトイレやおむつを使用している利用者もいる。また、日中には、健康・サービスクラスを活用して排泄パターンを把握し、職員は利用者一人ひとりに合わせた声かけやトイレ誘導を行い、トイレで排泄ができるよう支援している。入院時に、おむつを使用した利用者や、退院後にこまめなトイレ誘導で、トイレでの排泄などの自信を取り戻してもらうことにより、リハビリパンツ等の使用に改善できた利用者もいる。さらに、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、職員間で適切な用品を話し合うとともに、家族に確認の上で、使用をしている。加えて、水分補給や腹部マッサージ、服薬などで排泄をコントロールするよう努めているものの、慢性的な便秘の利用者もあり、医師に相談の上で、看護師等が浣腸の対応を行い、排便をすることができている。	
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解し食事や水分など気を付けている					
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排泄チェック表に記載しパターンを把握するよう努めている					
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々々の状態にあった支援を行っている。	○	体調の悪い時以外は、トイレでの排泄を促している。おむつ使用について、常に職員間で話し合っている。		◎			
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	訴えがなくても時間をながら誘導している。病的なこともあるので、尿量や尿色の異常などあれば受診している。					
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個々のパターンや兆候にあわせて早めに声掛けや誘導を行っている。					
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人、家族、職員間で相談しオムツの使用を決めている。本人の尿量に応じて使用するものを決めている。					
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	個々の尿量や昼夜に使い分けている。					
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	水分等多めに摂取して頂いたり、腹部マッサージなど行っているが、自然排便にはつながらないため、便秘薬を併用している。					
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	曜日や時間帯は希望に添えていない。温度や入浴時間は個々に合わせている		◎		利用者は、週2回入浴することができる。職員の勤務体制によるもの、午前と午後入浴を可能としている。また、利用者の希望に応じて、湯の温度や湯船に浸かる時間などの対応をしている。さらに、「汗をかいていないのでいい」と、入浴を拒む利用者もあり、無理強いはいはしないものの、日にちや時間を代えて声かけをするなどの工夫を行い、入浴してもらうことができる。事業所内の浴槽は個別浴槽のため、湯船に浸かりにくくなった利用者には、シャワーチェアを活用して入浴支援をするとともに、利用者の状態に応じて、デイスービスの特殊浴槽を借りて支援したこともあり、職員は安心安全な入浴支援に努めている。加えて、ゆっくりとした入浴支援に努めるとともに、自分でできるところは洗浄してもらい、職員はできない部分の介助をしている。	
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	個浴のため一人一人がゆっくり入浴できるよう支援している					
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	できるところは自分で洗っていただき、できないところは介助している					
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ちよく入浴できるよう工夫している。	○	拒む方は無理に行わず、日や時間を変えて本人が納得の上で入浴している。					
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前には、血圧・検温測定を行い健康状態の良い時に入浴している。入浴後も体調の確認をしている。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	夜勤者が個々の睡眠状態を記録している。				事業所には、眠剤などの服薬をしている利用者があるものの、日中の体操や散歩などの活動量を増やしたり、落ち着ける環境づくりをしたりするなどの工夫を行い、現在は、ほとんどの利用者が夜間に良眠することができている。以前は、昼夜逆転をしていた利用者もおり、利用者の体調面を考えて、職員は医師に利用者の昼夜の生活状態を伝えて、眠剤等を処方してもらうなどの対応にも繋げている。また、退院後に環境の変化などの不安から、不穏や夜に眠れない利用者もおり、医師と相談しながら、改善された利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	日中の活動を増やしたり落ち着ける環境作りにかけている。				
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	日中、夜間の状態を記録し主治医に伝えている。				
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	居室で過ごしたい方は、居室で過ごしていただいている				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	希望があるときには、手紙を書いたり電話をしている。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人が「かけない、書いて」と言われるときは代筆している。電話など聞こえづらいときは、職員が間に入るよう支援している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	気兼ねなく話ができるよう配慮している。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	本人に渡している				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	本人が話をしたいときには電話をかけることについて理解していただいている				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	◎	理解している				
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	近隣に店がなく買い物に行く機会がない				
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」など一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	お金を所持している方もいるが、買い物までは行っていない				
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時に話をしている				
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	金銭管理は家族が行っている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	希望や状態に沿ったサービスを提供できるように努めている	◎		○	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられているものの、可能な範囲で、利用者や家族の要望には、柔軟に対応をしている。また、遠方に住んでいる家族も多く、要望に応じて、職員が病院受診を同行支援することも多くなっている。
<b>(3) 生活環境づくり</b>									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	玄関や建物周囲には季節の花が咲き、気軽に入入りしやすいようになっている	◎	○	○	事業所は、特別養護老人ホームやケアハウスが併設された3階建ての複合施設の1階部分にあり、玄関前には駐車場が確保されている。また、事業所の横には海の絶景が眺められるほか、反対側には山の景色も見られ、民家も少なく、人通りは少ないものの、車で来訪しやすくなっている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾は家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	○	季節感を味わえるような飾りつけを行っている	○	○	○	事業所の近くには、海の絶景が広がっているほか、木々が植えられた中庭のウッドデッキを囲むように、2ユニットが設置されている。中庭のウッドデッキには、リビング等から利用者は自由に出られるようになっており、設置されているベンチで寛いだり、片隅にある菜園に花や野菜を植え、水やりなどの世話をしている利用者もいる。また、オゾンやイオンの発生機能の付いた空気清浄機等が設置されているほか、利用者にモップ掛けや履き掃除などを手伝ってもらいながら、毎日清掃や消毒、換気を行き届き、快適な空間となっている。さらに、ユニットの入り口には、職員の名前と似顔絵を描いた一覧を貼り出し、家族や来訪者に職員を分かりやすくする工夫をしている。加えて、リビング等の壁には、季節に応じて、ひまわりのちぎり絵や銀杏の葉を飾ったり、利用者の好きな動物や風景の写真を貼り出ししたりしているほか、中庭に植えられた木々から季節の移り変わりも感じられ、利用者や来訪者は季節感を味わえるようになっている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日掃除や換気を行っている			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節感にあわせた行事を計画し参加している。また、中庭には季節の花や野菜を植えている			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う方同士で自由に過ごされている				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所時、使い慣れたものを持参してもらい居心地のいい空間を作っている	◎	◎	居室には、ベッドや床頭台、エアコン、クローゼット等が備え付けられている。入居時に、管理者等は、馴染みの物や使い慣れた物を持ち込めることを伝えており、テレビや冷蔵庫、たんす、仏壇を持ち込んでいるほか、家族の写真を飾るなど、居心地良い空間づくりをしている。また、広いクローゼットに片づけられ、すっきりとした印象を受ける居室も多い。	
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	安全を確保し、自立した生活が送れるよう支援している			○	廊下やリビングは、ゆったりとした空間が確保され、車いすの利用者も移動しやすい動線が確保されている。また、居室が分かりにくい利用者には、職員が誘導するよう努めているほか、居室の入り口には、大きく名前を表示して、入室を認識しやすい工夫をしている。さらに、利用者が掃除を手伝えるように、モップなどを用意しているほか、自分で新聞を取っている利用者もいる。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	使用する際に渡している				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	○	所在確認を行い、自由に歩けるようにしている。落ち着いたきのない時などは所在確認を常時行っている	◎	◎	○	職員は勉強会等で学び、鍵をかけることの弊害を理解している。複合施設には、事業所専用の玄関が設置されているものの、コロナ禍において、外出や面会の制限が設けられていることもあり、現在は複合施設の共用の玄関を使用している。また、玄関は外部から自由に入室することができ、複合施設の事務所職員が迎えてくれるものの、1階には、デイサービスの利用者もあり、海が近くあることから利用者の安全面等を考えて、内側からロックを解除してから、屋外へ出られるようになっている。さらに、日中には、ユニットの入り口は開放しているほか、普段履きのまま、自由に中庭のウッドデッキに出られるようになっている。加えて、外出願望のある利用者には、一緒に散歩に出かけるなどの対応をしている。夜間は防犯のため、19時から8時まで、玄関の施錠をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	その都度話し合っている				
<b>(4) 健康を維持するための支援</b>									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	面談記録やアセスメントに個々の病歴など明記している。いつでも閲覧できるようファイリングしている				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	毎日、バイタル測定を記録し、異常の早期発見に努めている				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	日中、夜間を問わずいつでも協力医療機関に連絡が取れる体制を作っている				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	入所前からのかかりつけ医に受診されている方もいる	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	訪問診療を定期的に受けている。常に連携を図っている				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	その都度、連絡・相談・報告している				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院時には、本人の状態を明記したサマリーを渡し情報提供している				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	日頃から情報交換や相談を行い連携を図っている				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	看護師の配置はないが、何かあれば併設施設の看護職員や協力医療機関に相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	協力医療機関に24時間連絡が取れる体制を作っている				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	普段と様子が違うなどの変化があれば協力医療機関に相談し受診している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	個々の薬剤情報をファイリングし理解に努めている。異常があれば、家族や医師に相談している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	薬の管理は職員が行い、医師の指示通り服薬助助を行い誤薬のないよう工夫している				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日々の状態を観察し記録している				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入所時や状態の変化時に家族と相談している				事業所では、看護師が配置されていないこともあり、開設時から看取り支援は実施してならず、入居時に、管理者等は重要事項説明書等を活用して、家族等へ対応できることを伝えるとともに、医療支援が必要になった場合には、病院や他の施設へ転院するようになることを伝えている。また、職員は、可能な限り、事業所内で継続した生活が送れるよう支援しているものの、状態の変化が見られた場合には、家族や医師を交えて話し合い、方針を共有して、転居等の手続きを進めている。さらに、医療行為等が必要になった場合には、併設された特別養護老人ホームへ転居するほか、他の施設や病院へ転院する利用者もいる。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化、状態の変化に伴い家族や主治医と話し合っている	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	その都度どこまで支援できるのか話し合っている				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入所時や状態の変化時に家族に説明している。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	重度化、状態の変化時には、医師の意見を踏まえたうえで家族と相談している				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族の気持ちをその都度聞いている				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	マニュアルを作成。感染症について勉強会を行っている				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	マニュアルに沿って対応。勉強会も実施。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	最新の情報を随時取得している				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	職員は出勤時に手洗い、うがいを徹底している。利用者は毎食前、手指の消毒を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>II. 家族との支え合い</b>									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	日々の状況報告だけでなく、日常会話も含めて伝えている	/	/	/	コロナ禍以前は、家族に行事への参加を呼びかけて、そうめん流しや複合施設の夏祭りなどの参加協力をしてもらい、交流を図ることができていたものの、コロナ禍において、家族への行事参加の呼びかけは自粛している。事業所には、面会制限も設けられているものの、町行政から提供されたタブレットを活用して、オンライン面会を実施するほか、居室の窓越しで面会に対応する工夫をしている。また、毎月担当職員が、利用者の現状確認などのモニタリングをした近況報告を送付して、利用者の状況を伝えている。加えて、来訪時や電話連絡時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、意見や要望を聞くよう努めている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの事業所の出来事が家族に十分に伝わっていないことが窺えるため、毎月の近況報告の送付時に、事業所の出来事や職員の入退職等を記載した連絡事項を添えて送付したり、来訪時に伝えたりするなど、家族への周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	感染症対策により施設内での活動には参加できていない	○	/	○	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎日の暮らしぶりや日常の様子などを記入し近況報告として毎月送付している。	◎	/	○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	面会時は声をかけ、状況や状態を伝えている	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	×	感染症対策により行事の案内は行っていない。	×	/	△	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にされた対応策を話し合っている。	○	入所時に説明している。また、落ち着かないときや退院後のなどにもリスクを伝えている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	来訪時には、声をかけている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時に契約書、金銭面の明記されている重要事項説明書を説明し同意を得ている	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	状態が変化し退居が必要となった場合は、家族と相談の上で退居先に移れるように支援している。	/	/	/	
<b>III. 地域との支え合い</b>									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議等で施設への理解を図っている	/	◎	/	コロナ禍以前は、複合施設のシェルター等を活用して、避難訓練を実施したり、複合施設が合同して、運動会や夏祭りを開催したり、コーラスボランティアを受け入れるなど、地域住民等と交流を図ることができていた。近隣には、住宅が少ないものの、隣にある会社の技能実習生の寮があり、住民等と挨拶を交わすこともある。以前は、近隣にしろすパークの食堂があり、夏には海水浴の客でにぎわう時期もあったが、食堂の移転やコロナ禍もあり、人通りは少なくなっている。また、地域の高校が歌唱等を撮影したデータを送ってくれ、鑑賞を楽しんだこともある。コロナ禍において、地域住民とのあいさつ程度に留まっているため、コロナ禍の収束後には、地域行事に利用者と一緒に出かけたり、複合施設周辺には、地域住民が少ないこともあり、複合施設のケアハウスやデイサービス等の利用者を近隣住民と捉えて、交流を図ったりするなど、利用者が地域の一員として、継続した生活が送れることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	近隣に民家がないが、畑などに来られているときに出会うと挨拶はしている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	ほとんどない	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	以前は行事にこられていたが、現在は感染症対策の観点から行事は行っていない	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	以前は行事にこられていたが、現在は感染症対策の観点から行事は行っていない	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	行っていない	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	近隣の高齢者福祉施設や事業所と災害相互応援協定を締結している。消火、避難訓練等を通じて消防署との関係を深めている	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	現在は感染症予防の観点から書面会議になっている。	×	/	△	運営推進会議は、利用者や家族の代表、地区の区長、民生委員、保育所長、介護相談員、他の事業所の管理者、町担当者等の参加を得て開催をしている。コロナ禍以前は、そうめん流しや運動会などの行事に合わせて会議を開催して、利用者の様子を参加メンバーに見てもらい、意見をもらうことができていた。コロナ禍において、書面会議となっており、参加メンバーや家族に資料を送付しているものの、利用者家族等アンケート結果から、家族に会議への十分な理解が得られていないことが窺えるため、会議会則の所掌事項に沿ったより詳しい会議資料を作成したり、資料の送付時に、簡単なアンケート形式で意見を記載して返信してもらったり、コロナ禍の収束後には、全ての家族に会議への参加を呼びかけるなど、職員間で周知方法を検討するすとともに、参加メンバー等から出された意見がサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	報告している	/	×	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	以前はテーマに合わせて日程、時間調整をしていた。	/	/	○	
<b>IV.より良い支援を行うための運営体制</b>									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	法人の理念に沿って支援している	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内に掲示している	/	△	×	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	法人内の研修に参加している	/	/	/	事業所では、研修を含む年間活動計画を作成して、テーマを決めて新人や現任研修を開催し、職員のスキルアップに努めている。また、不適切ケアチェックシートを活用して、職員一人ひとりに振り返りの機会を設けるとともに、管理者等はコメントを記載して、職員に伝えている。複合施設の施設長が、定期的に事業所への来訪があり、利用者や職員の意見を聞いている。さらに、管理者は、日常業務に従事していることもあり、現場で職員の声を聞くとともに、相談にも応じている。加えて、管理者等は、職員の勤務体制の希望に対応するとともに、希望休や有給休暇を取り入れたり、ストレスチェックを実施したりするなどの働きやすい職場づくりに努めており、職員は管理者等とも話しやすく、職員同士の良好な関係も築かれ、近年離職者はほとんどいない。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	施設全体の勉強会計画に沿って勉強会を行っている	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	個々の努力や実績等を把握している	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	現在は感染症予防の観点から、他事業所の運営推進会議に参加できていないが、電話などで情報交換を行っている	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	ストレスチェックを実施している。職員同士、相談しやすい環境づくりを心かけている	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	マニュアルを作成している。マニュアルに沿って勉強会を実施している	/	/	/	○ 年間研修計画の中に、虐待防止等のテーマを取り入れ、職員は学んでいる。また、マニュアルを作成するとともに、身体拘束適正化委員会を活用して、職員間で話し合いをしている。さらに、職員は個別に「不適切な行為を行っていませんか」など、不適切ケアチェックを行い、自らの反省点を記載するとともに、管理者等が確認して、コメントを残すなど、ケアの振り返りに繋げている。時には、大きな声を発する職員が見られるものの、職員同士で注意し合うとともに、管理者等から該当職員へ確認を行い、注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	その都度話している。不適切ケアチェックを行い自身のケアを見直ししている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	職員の疲労が出ないように勤務を組んだり、ストレスによりケアに影響がでていないか注意を払っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	マニュアルを作成している。マニュアルをもとに勉強会を行い理解している。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	常に職員間で話あっている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	現在そのような事例はない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	勉強会を行っているが、情報提供や相談にのるまではできていない				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	連絡体制は築けている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成し周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	実践的な研修は行っていない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットの報告書を作成している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	個々のリスクや危険を検討し、個別計画に取り入れている				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	◎	施設内のマニュアルを作成している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情があった場合は手順に沿って対応している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	寄せられた苦情は速やかに対応し納得が得られるようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口を設けている。面会や来訪時に個別に聞くようにしている。	◎		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くよう努めている。コロナ禍において、家族が来訪して話す機会は減少しているものの、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えた上で、意見や要望を聞いている。また、事業所には相談窓口を設置していることを家族等には伝えているものの、ほとんど相談が寄せられたことはない。さらに、管理者等は、職員と一緒に日常業務に従事していることもあり、現場で一人ひとりに声をかけて意見を聞いたり、個別の相談に応じたりするなど、職員の意見を取り入れて、一度試してみるなど、サービスの質の向上に繋がるよう努めている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	◎	苦情相談窓口を設け施設内に掲示している。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	個別に話を聞いている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	個別に話を聞くようにしている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年に一回自己評価を行っている				外部評価の自己評価は、職員一人ひとりが取り組むとともに、管理者や主任が取りまとめ、ユニット毎に作成をしている。サービスの評価結果は、職員会等で職員に周知するとともに、目標達成に向けて取り組んでいる。また、運営推進会議を活用して、管理者等は、評価結果や取組み状況を参加メンバーや家族に報告している。さらに、コロナ禍以前は、行事等に合わせて、運営推進会議を開催していたこともあり、参加メンバーに利用者の様子や取組み状況などのモニター的な役割を担ってもらい、意見や要望をもらうこともできていた。利用者家族等、地域アンケート結果から、サービス評価の取組みに対する十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、集合形式の運営推進会議において、アンケートの趣旨を伝えたり、取組み状況のモニターの協力を参加メンバーや家族に呼びかけて、意見をもらったりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標が達成できるよう取り組んでいる。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議にて評価結果や今後の取り組みについて報告している	×	×	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	行っていないため今後は行いたい。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	◎	災害ごとのマニュアルを作成している。	/	/	/	年2回、複合施設と合同で、消防署の協力を得ながら、日中や夜間を想定した避難訓練を実施している。また、各災害マニュアルを整備するとともに、県や町行政等と協力をしながら、原子力避難行動計画等に沿った訓練も実施している。さらに、複合施設は、町行政から福祉避難所に指定されているとともに、原子力災害等の際の避難場所となる屋内退避棟(シェルター)が設置されている。加えて、複合施設として、協力体制を確立するとともに、事業所内には、避難経路図を貼付して、外部の来訪者等にも分かりやすくしている。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して、十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲載したり、家族や地域住民に避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取組みが理解してもらえるよう、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	訓練計画に沿って実施している。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に点検している。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地区の合同訓練には参加するが、避難場所が施設内の屋内退避等になり協力体制は確保されていない	x	x	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	○	消防署立ち合いの元、訓練を行い指導や助言をいただいている。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げていく認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	x	行えていない	/	/	/	複合施設・事業所として、地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。以前は、複合施設に在宅介護支援センターが存在していたものの、現在は、町行政の地域包括支援センターに相談機能が集約されている。地域アンケートの中には、「何でも相談できる機会を設けて欲しい」という記載もあり、近隣住民は少ないものの、複合施設と協力をしながら、出された意見に対応して、地域のケア拠点としての機能が発揮されることを期待したい。また、コロナ禍において、町行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加できる機会は減少しているものの、コロナ禍以前から他の事業所の運営推進会議に相互に参加し合うなど、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	x	行えていない	/	x	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	x	感染症予防の観点から解放していない	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	x	感染症予防の観点から受け入れていない	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	地域包括支援センター主催の勉強会があれば参加している。連携は普段から図れている。	/	/	○	